東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
新聞会
責任者
遊佐めぐみ

五月号

国試九割届かず

平成五年度薬剤師国家試験結果発表

先日行われた平成五年度第七十九回薬剤師国家試験の結果がこの度発表された。その主な数字は次の通りである。

本学合格率
新卒者　八九・二六％
既卒者　三一・七三％
全国平均合格率
新卒者　八二・二五％
既卒者　三八・六六％

新卒者の合格率は八九・二六％で、去年とほぼ同じではあったが、今年も九割台には及ばなかった。

そこで今回の結果における問題点や国試に対する学生の心構えなどについて山田泰司教授に伺ってみたところ、次のようなことを指摘された。

まず第一に挙げられる事は常時の講義に対する本学生の態度である。出席をとらないからと言って勝手に授業を休んだり、開始時刻を過ぎてから入室して来るなどといった態度は、東薬生の悪い癖である。真面目に授業に出席し、低学年からの勉強を積み上げていくことが大切である。

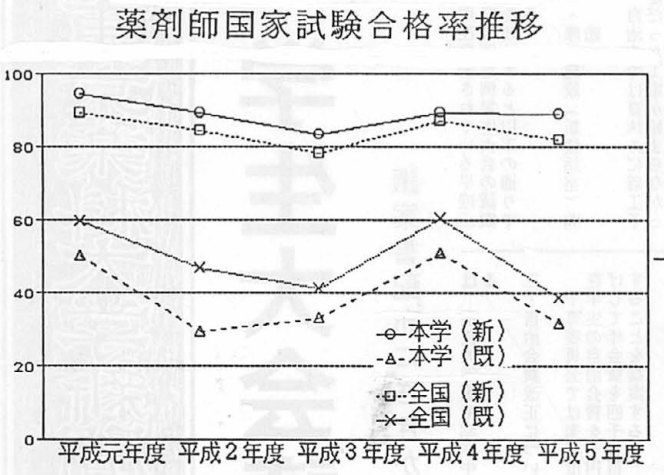
また、卒業が決まってからの過ごし方にも問題があるようだ。卒試が終わり、無事に卒業できたということで気をゆるめて、勉強を怠っていると思わぬ結果に結びついてしまう。この時期は引っ越しなどが重なり何かと忙しくなりがちなので、国家試験までは気をひきしめて計画的に過ごすことが大切である。

薬剤師国家試験は年一回しか行われず、万一合格出来なかった場合、来年まで待たなければならない。だから前・後期試験のように再試でなんとか通せば良いという考えはやめて、日頃から試験は一回で通すように自分に厳しい態度で臨まねばならない。つまり、普段の生活態度から改めていくことが国試突破への近道である。

学校側の対策としては、模擬試験や補講などを行ってきている。しかし学校側のこうした国試対策も、学生の取り組み方によっては、全く効果がない。国家試験を受けるのは学生自身なのだから、そのことをしっかりと自覚するべきである。また、卒業試験の合格基準と足切りラインが上がっているようである。このことについては、まだはっきりとわかっていなく調査中であり断定できないが、わかり次第学生に知らせるそうだ。

ご存知の通り、薬剤師国家試験は、二年後から新しいやり方になり、現在と大きく変わる。したがって来年度合格できなかった場合、次の年の国家試験に合格するのは今まで以上に難しいこととなってしまう。これについて山田教授は、現在の四年生には卒試・国試とも是非とも頑張ってほしいと強く述べた。

薬剤師の資格は薬学部学生の目標であり、社会に出て活躍するための大切な鍵なので



平成六年度入試結果

今年度の入試の受験者数、合格者数および正確な入学者数が発表された。詳しい数値等は左の表を参照されたい。

	募集人員	受験者数	合格者数	入学者数
薬学部　（男子部）				
推薦	60	160	53	53
一般Ａ方式	20	1,286	150	23
一般Ｂ方式	160	1,407	336	202
合計	240	2,853	539	278
薬学部　（女子部）				
推薦	60	356	62	62
一般Ａ方式	20	1,822	151	11
一般Ｂ方式	100	1,283	237	133
合計	180	3,461	450	206
総計	420	6,314	989	484
生命科学部　（分子）				
公募推薦	30	106	34	32
一般Ⅰ期	55	1,106	146	73
一般Ⅱ期	15	433	15	14
合計	100	1,645	195	119
生命科学部　（環境）				
公募推薦	20	42	21	21
一般Ⅰ期	30	336	73	38
一般Ⅱ期	10	172	11	9
合計	60	550	105	68
総計	160	2,195	300	187

平成6年度入試結果

今回の入試で今までと異なるところは新学部、つまり生命科学部の入試が実施されたことである。生命科学部の募集人員は、分子生命科学科、環境生命科学科の両学科合わせて一六〇名。それに対して受験者数は推薦試験、一般試験合わせて二一九五名にも上り、初年度からかなりの高倍率となった。しかし、入学者数を見ると、ほぼ募集人員に近いものとなっており、大学の合格ラインの設定も、適切なものであったといえる。

薬学部については、前回から導入された、Ａ方式（センター試験による試験）の受験生が前回よりも、男子は約千名、女子は約三千名近くも増加しており、本学のセンター試験導入が、受験生の間に広く知られるようになったということを反映したものと思われる。

また、昨年度の入学者数は不況のあおりを受けてか、例年より十パーセント近くも多い五六一名であったが、今回は四八四名と再び減少しており、いわば「異常気象」の年から「平年並み」に戻ったといえそうだ。

バーンズコレクション

巨匠たちの殿堂

アメリカのフィラデルフィアにあるバーンズ財団は創立者アルバート・Ｃ・バーンズ氏が収集した、フランス近代絵画を中心とする二千五百点以上の美術品を所蔵している。しかしこれらのコレクションは、バーンズ氏の遺言により貸し出しはおろか、画集や複製の作成まで禁止されてきた。その門外不出であるはずの彼のコレクションが、どういう訳か今年の一月二十二日から四月三日にかけて、上野の国立西洋美術館で展示された。その理由はどうであれ、これは「幻のコレクション」と呼ばれるバーンズ・コレクションの名品の数々を鑑賞できる、まさに最初で最後の機会だったわけである。

今回の展覧会で出展されたのはルノワール、セザンヌ、ピカソ、マティス等の巨匠たちの作品八十点である。想像どおり館内の混雑ぶりは壮絶を極めた。たしかに一目見てみたいと思う気持ちは分かるが、あれほど人が多いとまるで美術品ではなく、人の頭を鑑賞しに行ったような感じがした。

薬味

皆さんはこの不況をどう乗り切っているだろうか。国語辞典によると倹約とは「浪費は罪悪という見地に立って、むだ使いをしないようにして費用を切りつめること」で、ケチとは「必要以上に物やお金を惜しむこと」とある◆先日、テレビで様々な倹約家が自分達の節約術を披露していた。ヤミ米でも有名な城南電機の宮路社長は食事はお腹が膨れればいいからと、具が入っていないうどんを食べていた。洋服の裏もぼろぼろだった。数千万円も持ち歩き、ビジネスをキャッシュでポンしてしまうあの社長が、である◆一方、新聞はいっさいとらずお客が来てもお茶を出すのはもったいないからと水を出すという人や、二十年間風呂の水を変えていないという人もいた。彼らはとても見すぼらしい格好で、自分の価値観を他人に押しつけているようだった。しかし身だしなみというのは他人に対する最低限の礼儀である。この番組で節約術を学ぼうとした私だったが彼らの貧相の姿を見ると、数日間は財布のヒモがゆるんでしまった◆では両者の違いは何か。明らかに目の輝きが違っていた。宮路社長は水を得た魚のように生き生きしていたが、有名な倹約家達はまるで『死にかけ人形』のように（これならまだかわいげがあるが）ただ心臓が動いているだけという印象をもった。無駄をなくすというのは全てをなくすのではなくこれだけはゆずれないというものを最大限するために他の物を減らすことではないか。倹約が趣味なのもいいが他人を巻き込んではいけない。お金は使わなかったらトイレット・ペーパー以下である。（じゃ）

春ダ、桜ダ、新歓祭ダ！

今年も新入生の入学を祝う行事が多数、新歓祭実行委員会をはじめとした各団体の主催で行なわれている。そこで今回は以下に挙げた新歓行事を特集した。それぞれに個性あふれる催しである。なお、マラソン大会については次号に掲載予定である。

新歓キャンプ

去る四月一日（金）から三日（日）にかけて、北野大学セミナーハウスにおいて新歓祭実行委員主催の新歓キャンプが行われた。

キャンプは劇による班紹介から始まり、八つの班ごとのレクリエーションや講演会、合同レクリエーションなど盛りだくさんの内容であった。最初はぎこちなかった新入生も次第に馴染み、二日目の夜には夜通し語り合った。キャンプ後も班ごとに遊びに行ったりと、入学前に友達を作る良い機会になったようだ。

由木オリ

四月十六日（土）に、毎年恒例の柚木オリエンテーリングが行われた。

当日は好天に恵まれ、汗ばむくらいであった。十四の班が大学構内や大学周辺に設けられた十個のチェックポイントを回り、そこでダーツや風船取りなど様々なゲームをして楽しんだ。オリエンテーリング終了後はビンゴ大会を行い、上位三チームには賞品が出た。

山歩きで疲れつつも、大いに楽しみ、思い出に残る一日になったようだ。

春展

去る四月二十日から二十七日までの一週間、ＰＩＴにて春展が開催された。参加団体は華道部、写真部、美術部、やきものクラブの四団体であった。今年は音楽祭がＰＩＴで行われた関係か、やきものクラブの出品数が少なかったのだが、どれも逸品ぞろいで小規模ではあるがそれなりの展示会であった。

春展は新歓祭としてだけでなく、大学内での数少ない鑑賞会である。新入生だけでなく、上級生の目にも新鮮に映ったのではないだろうか。

音楽祭

四月二十日と二十七日の二日間、談話室「ＰＩＴ」において音楽祭が開催された。参加した部はギター部、ハルモニア管弦楽団、軽音楽部、合唱団、ジャズ研で、このうちハルモニアは二十七日のみの演奏であった。

休校日の土曜日に行われた昨年に比べると観客数は増えたようで、ジュース等が用意され、くつろいだ雰囲気であった。演奏はみな聴き応えがあったが、なかでもジャズ研が秀逸で、観客を感動させるに足る内容であった。

スポーツ大会

毎年の恒例である同好会部門主催のスポーツ大会が四月二十四日に大講堂、及び京王研修センターにて行われた。

例年通り、大講堂第一体育館でバスケットボールが、京王研修センター体育館でバレーボールが行われた。昨年よりも人数は少なめだが、どちらも新入生・上級生が入り混じって、なごやかな雰囲気のもとで活気ある試合が繰り広げられた。

新歓祭の行事の一環として新入生はもちろん、上級生も楽しめたのではなかろうか。

学術研究発表会

五月七日、午後一時三十分から一一講義室にて第十五回学術研究発表会が開催された。これは学術部門に所属している八団体が新歓行事の意味も込めて、日頃の研究の成果を発表するものである。

今回の優勝は生化学研究部であったが、どの部活も限られた時間と費用を駆使した高度な研究内容であり、発表の善し悪しなどような最後の詰めの違いだったようである。

広い会場は上級生・新入生で満員で、新歓行事としても大成功だった。

選管決定

過日行なわれた自治委員会において平成六年度執行委員会役員選挙の選挙管理委員会が発足した。

選挙管理委員会
委員長　斉藤　亜紀夫
（敬称略）

そこで選挙管理委員長の斉藤亜紀夫氏にお話を伺った。

「今年、選挙管理委員会を任された斉藤亜紀夫です。今年の選挙管理委員会は、前回と同じように副委員長のポストを置かずに、主に自治委員会の一年生を選挙管理委員会に採用しました。東薬一平均年令の若い委員会ですが、その若さでがんばっていきたいと思います。

さて、今年の選挙日程ですが、執行委員長、副委員長の任期が五月末日までということから、五月十六、十七日を投票日としています。執行委員長、副委員長が決まらないと部活動や各委員会の運営に支障が出てきますのでよろしくお願いします。

実は今年の選挙には僕なりのテーマが決めてあります。それは“Rising Sun”です。空に昇るあの太陽のように僕たち選挙管理委員会と、学生の皆さんがこの選挙に燃えることができたらという気持ちをこめて決めました。学生の皆さんに共感を持って頂けたら幸です。

最後に、陰で支えて下さっている前選挙管理委員長や他の自治委員会の人達に感謝します。」

自治議長交代

既に公示があったように、先日行われた第一回自治委員会において平成六年度自治委員会常任議長団が以下のように決定した。

議長　２−Ｃ武田　学
副議長　２−Ｇ御滝　朋美
書記　２−Ｃ仲保　克之
　　１−Ｇ松井　映子
会計　２−Ｂ佐野　穣太郎
（敬称略）

自治委員会とは東薬自治会の構成会員である学生の意思を直接自治会に反映する、いわばパイプ役となる委員会である。

新しい議長団のこれからの活躍に期待したい。

新聞会執行交代

新聞会では去る四月一日をもちまして執行交代を行いました。すでに公示にてご存知かと思われますが、改めてここでお知らせいたします。

会長　遊佐　めぐみ
副会長　青木　敏幸
会計　板倉　菜穂子
編集長　山中　芳行
副編集長　柴田　幸治

皆様に読み易い新聞をお届けできるよう努力してゆきます。どうぞよろしくお願い致します。

ハルモニア演奏会

去る四月二十四日（日）、日野市民会館大ホールにおいて、当大学ハルモニア管弦楽団の第十一回スプリングコンサートが開催された。

今回の演奏会では、ドヴォルザークの交響曲第九番など全三曲が演奏された。それらはとても有名な曲で、客席に聴き覚えのある素晴らしいメロディが「ハルモニア・サウンド」に乗って流れて来た。

次の演奏会が今からとても楽しみである。

新入生になったら

小学生の時である。毎年春になると、必ず「今年のめあて」というものを書かされていた。生来ぐうたらな私はどうにもこれが嫌いで仕方がなかった。

何しろまず書くことが浮かばない。「お友だちと仲良くすること」等、級友たちが苦もなく仕上げるのを横目に私はいつまでも色紙をいじり回していた。守れないと判っていることを書く気にもなれず、無難な線に逃げ込んでは三日ももたずに終わるのが常だった。

わざとらしい目標は、余計に守れなかったのである。

義務教育が終わって、もう「今年のめあて」を書かされることはなくなった。それどころか、強制されること自体ほとんどない。

何でも自分で決めていいのだ。そう思ったら急にすっとして、山の見晴らしにたどり着いたように感じられた。

本当に目指す山はずっと向こうにあるが、今は後ろを振り返る余裕がある。ここからどこに進むか、それが「めあて」なのだ。

早く子供の頃の窮屈さから解放されたくて、駆け上がるように大学まできた。ここでようやく「めあて」＝目標という言葉が自分のものになったように思う。何も一年ごとに決めることはないのだ。そう、たとえば十年サイクルでもいい。もう急ぐ必要もない。

三十の時、私は何になっているだろう。「大人」になることが義務だった子供時代に比べると、それはとてもおおらかで明るい遠望に思える。

後はゆっくり年をとっていくのだ。壮大で夢のある「めあて」を描こう。生来のんき屋の私だから、十年毎のこのペースが一番合っているに違いない。（Ｔ）

ワンダーフォーゲル活動報告

昨年度は夏・冬合宿を含め七回の合宿に行きました。夏は台風、冬は吹雪に見舞われながらも、とても楽しい合宿になりました。今年は六名の男子新入部員が入り、部活動にも活気が入ってきました。これからも我が部をよろしくお願いします。

※新聞会では、各クラブ・同好会・サークル等の活動報告の掲載を募集しています。ご希望の団体は、新聞会室までお越しください。

行事予定

五月
七日（土）　学術研究発表会
十四日（土）　マラソン大会

編集後記

五月になるとわが家（茨城県）の辺りでは、一斉に田植えが始まる。

私は小学校四年生の時から田植えの手伝いをしているので、連休中に遊びに出かけるなんてとても考えられない。

ああ、都会の家庭がうらやましい。

†ただいま午後三時十七分、まだ終わらない。（宵闇月）